

研究タイトル：

## 映画を用いた英語教育教材の開発



氏名：	梶本 浩美／AKIMOTO Hiromi	E-mail：	akimoto@akashi.ac.jp
職名：	教授	学位：	M.A. in TESL(英語教育学修士)
所属学会・協会：	大学英語教育学会, 外国語教育メディア学会, 映画英語教育学会		
キーワード：	映画英語教育, 教材開発, 異文化理解		
技術相談 提供可能技術：	・映画を用いた英語教育法 ・英語教育教材開発 ・英語教育全般		

研究内容： 映画を用いた英語教育教材の開発

英語の授業において映画を使用することは、いくつかの点において教育的効果が高まると言われて久しい。また映画を使った授業をしてほしいという学生からの強い要望があることも事実である。Harmer (2001) も指摘するように、実際に言語が使用されている場面を視聴することによって学生のモティベーションが高まるることは明らかである。さらに Stempleski & Tomalin (2001) は、映像を通して文化的な知識が増進されるため、映像の使用は広義において教育的であると述べている。しかし反面、映画を使用することには問題点も介在し、そのことが教室での使用を困難なものにしている。初級学習者はもちろん、上級者に対しても映画のセリフを聴き取るということは非常に困難な作業である。つまりリスニング力を問う問題にとらわれすぎると、教室で映画を使用することには限界が生じることとなる。そこで異文化理解や社会問題など内容面にフォーカスをあて、知的枠組みの拡張をゴールに設定することにより、映画がオーセンティック教材としてその真価を発揮することになる。つまり『英語力の低さ=知的レベルの低さ』という等式が成立しないため、映画選びの規準は異文化摩擦や文化的特色を含んだものが中心となる。

本研究では、(1) 映画使用の教育的効果の整理と問題点の解消、(2) 異文化問題を扱った映画の選択と教材化、及び初級学習者に対しても使用可能な教材内容を検討する。映画を利用することの教育的効果には以下が考えられる。

- ① オーセンティックな教材として提供可能。
- ② 学習者のモティベーションを高めることが可能。
- ③ 視覚的に訴える要素が大きいため、必ずしも英語力のみに依存する必要がない。
- ④ 異文化理解や社会問題の取り扱いが可能。
- ⑤ 言語の四技能に加え、文法や発音学習などへの応用が可能。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	